



TITLE:

我が蔵書の一冊

AUTHOR(S):

会田, 雄次

CITATION:

会田, 雄次. 我が蔵書の一冊. 静脩 1968, 5(4): 1-2

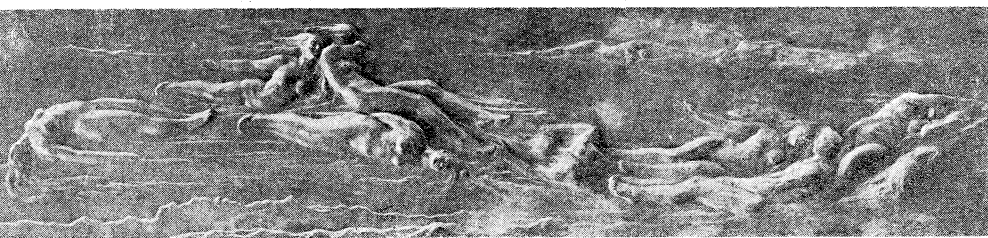
ISSUE DATE:

1968-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36483>

RIGHT:



我が蔵書の一冊

会 田 雄 次

学生時代、卒業論文にイタリア・ルネサンスをえらぼうと決心したときである。フォイトという人のヒューマニズム研究の上下二巻本を手に入れるかどうかに運命がかかっているような気がして来た。それも初版のは大したことはない。大変な名著といわれるのは三版であってページ数も三倍ぐらいにふえている。京大図書館にもないようだ。教授に願って東大に当たってもらったのだが、やはりない。先輩のルネサンス研究者で蔵書家として有名な塩見高年さんも初版本しか持っていない。大類伸先生さえ所持して居られない。

こうなると意地のようなもので、私はどうあっても、その三版物を手に入れようと決心した。ところが、たまたま送って来たグスタフ・フォックという古本屋のカタログを見ると、何とも簡単にその書名が出ているではないか。この本屋さんは当時東京に支店を出していた。こおどりにして早速注文した。学生は親のすねかじりだからのんきなものだ。それにあわてたためもある。うかつにも値段のほうを充分たしかめずにである。

1月ほどして本が送られて来たが、その請求書を見て私は青くなった。たしか375円だったと思う。昭和12,3年のことだから今日でいえば優に20万円以上の価値だ。驚いてよくよくカタログを見て見ると、たしかに300何マルクとある。私は零を1つ見落していたわけだ。それにちゃんと絶版で稀覯本と銘うってもある。私はおそろおそろ父のもとへ出頭し、事情を説明した。父もさすがにウンとうなったが、やがてにやりと笑って、よかろうと言だけ答えてくれた。よっぽど私が情けなさそうな顔をしていたからであろう。こうして私は偶然にも、この書を自分の蔵書に加えることができたのである。さて自分のものとなって安心してつくづくながめてみると、私製本らしく、いかにも20世紀初頭らしい手のこんだ装丁がしてあり、蔵書票もはってある。そんなのが持てたと思うと自分も一人前のような気がしてくるから、そういうところに蔵書の効があるのだろう。もっとも、内容はやけに細かい研究だ。大学の卒業論文程度ではとても活用とは行かない。第一むつかしくて完読することなど不可能。やむを得ず1部を引用したにとどまった。

それからもう30年以上の年月を経た。私自身ルネサンスに関しては多少の本を集めはしたが、これ以上高価な買物をしたことはない。集めた本も別に珍本というものもなく、ただ集

っていることでやっと価値が出て来たと自負できるにすぎぬ。日本で、おそらくは自分1人しか持っていないだろうなどと自慢できる本は、このフォイグトのもの1冊ということになる。世の中には途方もない本を持っている人も多いから、もち論安心はできないが、この本は小説や詩ではない。ごく地道な研究書だ。そんなものに興味を持つ人は限られているはずである。

しかし、考えて見れば情けない話だ。一応専門の研究者というものになっているくせ、所持する専門書の中で父に買ってもらった本しか自慢できるものがないのである。30年ちかく教師をしていて、自力では1冊もそれを凌駕するものが買えなかったとはである。とりわけ、それが資力の問題でないことが一番つらい。実は、それ以後読みたい本があっても、それを発見しようという努力をしなかったということなのである。いいかえれば、学生時代ほど学問に集中しなかった、研究意欲が低下する一方の30年間という証明にもなりそうだ。何とかして、もう1冊ぐらい珍しいものを手に入れてやれという気にもなろうというものである。もっとも、そういう心がけではとてもよいものは手に入りそうもないし、それでは安心立命できるわけでは到底ないのだが。

(人文科学研究所教授)

寄贈図書の評価基準まとまる

従来部局間で不統一であった寄贈図書の評価基準をこの際統一して、少しでも業務合理化の一助にしたいという趣旨から本館と部局図書室の間で検討していたが、このほど評価基準製がまとまったので解説してみたい。

この評価は時価で行なうのがたてまえであるので、基準算定の方法として和書については出版年鑑1968年版によって主題別、版型別と社会・自然系に分けて約350冊を抽出した。また洋書、中国書等は現物に当て調査し、1ページ当たりの単価をそれぞれ算出し、それを根拠にして作成されたものである。

この表をみればわかるようにやはり人文社会系と理工系とでは価格上ひらきがあって大判になるほどその差が大きいこと。洋書のうち、英・仏書はほぼ等しいが、ドイツ書はやや高い。中国書には北京版、香港版、台湾版がそれぞれ少し価格差があることなどがうかがわれた。

この基準表はただ評価の一つの目安と考えるべきで、個々の図書の特殊性に応じて評価額を適宜しんじやくすべき場合もちろんあるが、現時点での一応の基準を示すものと考えられる。

昭和43年9月

区 分	和 書		洋 書		中 国 書		備 考
	社 会	自 然	社 会	自 然	平装本	精装本	
A 6	1 円	1 円	円	円	1 円	2 円	ロシア語は 和書に準ずる
B40	1	1					
B 6	2	3	3.5	5	1	2	
A 5	3.5	5	7	10	1.5	3	
B 5	6	6.5	10	14	2	4	
A 4	8	10					

(注 ページ単価)